

天使 守護 聖

奈聖 光御

催眠NTR地獄

筑摩十幸
挿絵 / ちうね



試し読み版

18

未 満

二次元ドリームノベルズ

第零話	美少女天使華麗に登場す	006
第一話	美少女天使夕闇に散る	059
第二話	脅威！ 悪魔の洗脳拷問	094
第三話	悪夢！ 狂気の妊娠調教	138
第四話	壊れる心。崩壊への序曲	198
最終話	墮天！ 魔族に堕ちた天使	270

登場人物紹介

Characters



みひかりせな
御光聖奈

天界から人間界に舞い降りた元エリート天使。
名誉挽回のためメシア候補の警護任務を行う。

いぬいゆうと
乾優斗

人間界の救世主、メシア候補の少年。



ベリアル

サタンに次ぐ最強の墮天使、七大魔王の一人。
聖奈たちに凶刃を向ける。

すきいぞう
州器以蔵

悪魔の力を手に入れた非常勤講師。

第零話 美少女天使華麗に登場す

「ちよつと先行しすぎましたかしら」

薄暗い川の畔ほとりを一人の少女が歩いていった。

そこは天国と地獄の境界にあるアムレスの川。常に戦い続ける天の軍勢と悪魔軍との最前線であり、一步踏み込めば魍魎ちみもつりようが徘徊する危険な場所だ。周囲に立ちこめる濃霧の向こうで、怪しい気配うしろめが蠢うごめいているようにも見える。

「そもそも、他の皆さんが遅すぎますのよ」

上品な言葉遣いとは裏腹に、生意気そうに唇を尖らせる金髪碧眼へきがんの少女。

頭を飾る光の輪、その光を受けて輝く金髪のツインテールが身体のサイドに流れ、背中から伸びた一對の白い翼を華やかに飾る。そう、彼女は人間ではなく神々しくも愛らしい天使なのだ。

切れ長の碧眼はサファイアのように煌めき、それを囲む長い睫毛まつげは気が強そうに上に反っている。スツと通った鼻筋には高貴な血筋が垣間見え、僅わずかに口角の上があった花びらのような唇も気品に溢れていた。

身に着けた白の軽装束は天使スクールの制服だ。シンプルなデザインの中にも、V字に開いた胸元や風に舞うスカートの裾などには、少女から大人の女へと移ろう一瞬の魅力を引き立てるデザインが施されており、生徒たちからもとても人気があった。一見無防備にも見えるが聖なる力に加護されており、ミスリルの鎧にも匹敵する防御力を有している。所々に配された蒼いラインは防御用の青石が縫い込まれ、ウエストなどを引き締める革具の茶色もアクセントとなつて凛々しさを増している。

その胸元を押し上げる二つの膨らみは、少女天使の年齢にしてはかなり豊かな方で、Fカップはあるだろう。まだ熟れきつてはいないが、ツンと生意気そうに上向くバストラインは新鮮な果実の魅力があった。

ウエストは砂時計のように見事にくびれ、その下のヒップラインに綺麗に繋がっている。スカートの下は見えないが、僅かに裾を持ち上げるお尻の丸みは十分に女性的だ。

そこから伸びる二本の太腿は神殿を支える大理石の御柱のように、白く強くしなやかでスラリと長い。鍛えられた筋肉とそれを包む皮下脂肪との絶妙のバランスは、神が設計図を引いたかのような機能美を誇っていた。

「あら？」

しかしその可憐な天使に危機が迫っていた。

「グルルル……天使だ……」

「一人で地獄に入ってくるとは……何のつもりだ？」

「まだガキじゃねえか」

彼女を狙う黒い影たちの正体は悪魔の群れである。河原の岩陰に身を隠しながら、ジリと包囲の輪を狭めていく。その数およそ百。いかに実力があるうとも、その戦力差は絶対的に不利な状況である。

「ふふっ、それで気配を消しているつもりですか？ バレバレですわよ」

だが少女天使は隠れるでもなく、撤退するでもなく、タンツと地面を蹴り、河原で一番目立つ大きな岩の上に飛び乗った。そして……。

「わたくしは御光みひかり聖奈せな、十万十七歳の超エリート美少女天使よ！」

両腕を組んで仁王立ちし、開口一番、悪魔共を眼下に見下ろして高々と名乗りを上げたのだ！

「父も母もセラフという純粹血統！ 天使スクールを初等から中等部まで全学期学年首位で駆け抜け、来春から飛び級で一流天使大学に進学！ そこも次の年には首席で卒業し、宇宙の平和を守る天使軍の上級士官になってみせますわ！」

壮大な話に悪魔たちが傍観する中、聖奈の自己紹介は続く。

「そして地獄の魔物も墮天使も一匹残らず討ち滅ぼし、神に牙剥く悪魔王サタンの首を取ってあげます！ このわたくしこそが、太古から無限に続く天国と地獄の闘いに終止符を打つ天に選ばれし極上天使！ そしてその偉大な功績が認められ、憧れの大天使ミカエル様やガブリエル様とキャツキャツウフフな毎日を……ああ、お二人から同時にプロポーズされたらどうしましょう？」

「黙れ、妄想バカ天使！」

「ふざけるな、クソガキめ！ お前ごときがサタン様の御名前を口にするなど、無礼千万だ！」

「その生意気な舌を引き抜き、手脚を千切り、生首を晒してくれるわあ！」

あまりのビッグマウスにぶち切れた悪魔たちが一斉に飛びかかった。

ドカドカドカアアアッ！

何十本という槍や矢が美少女天使に殺到し突き刺さる。かに見えたが……。

「ふふんっ、なんて愚かなの」

仁王立ちのまま、聖奈は一步も動いていない。にもかかわらず、すべての攻撃が当たっていないのだ。美しくたなびく金髪も、流麗なスカートの裾にも、整えられた指先にさえ、掠り^{かす}もしない。まるで見えない壁に弾かれるように、悪魔の攻撃は消失していた。

「な、なぜだ!? なぜ当たらない?」

「なぜならばっ! わたくしが美しすぎるからですわっ!」

キュオンツ!

聖奈の両手に聖なるオーラが収束し、白銀に輝く小振りな剣と、十字の模様を彫り込んだ円形の盾が出現する。

「あなたたち下等な悪魔の攻撃など、わたくしの美の前にはゴミも同然! 一切通用しませんのよ!」

「な……なんだって……美……?」

「ど、どういうことだよ?」

わけがわからず、ポカンとする悪魔たち。それを見下して聖奈は哀れむような眼差しでフツと鼻で笑った。

「はあっ? わたくしの美しさも理解できないなんて、なんて哀れで惨めな存在なのかしら。さあ、愚鈍にして無知、醜悪にして邪悪なる者たちよ、全員まとめて滅菌消毒ですわっ!」

輝く光翼をはためかせ、天使が高々と飛翔した!

「お母様、ご用件は何でしょうか」

聖奈が学園長室の扉を勢いよく開けると、淡い光に包まれた部屋に女性の天使が一人、優雅に紅茶を飲みながらソファに座って待っていた。美しいロングのブロンド、整った顔立ち、切れ長の澄んだ青い瞳は聖奈とよく似ている。

「ここでは学園長と呼びなさいと言っているでしょう」

表情は変わらないが、口調は厳しい。彼女は御光樹利亞じゅりあ、聖奈の母親であり、天使学園の長でもある。

「あ、御免なさい、お母……学園長。ところで大事なお話というのは？」

「聖奈、貴女は本日付で停学処分です」

「は？」

一瞬何を言われているのか理解できず、聖奈は青い瞳をパチクリと瞬きました。そしてすぐさま、明晰な頭脳で仮説を打ち立てた。

「イヤですわお母様ったら、冗談なんて……今日は四月バカではありません事よ」

「停学です、無期限停学、実質退学」

「えええ———— ツッ」

くらくらつと目眩を感じてよろめいた。それは彼女の順風満帆人生で感じたことのない

衝撃。初の挫折であり蹉^{さてつ}踏^{たつ}なのだった。

「ど、ど……どうして……わたくしが……」

「これを見なさい」

学園長室の照明が消え、カーテンが閉ざされ、黒板の前に白いスライドがスルスルと降りてきた。そして映像が浮かび上がる。

「あ、これはわたくしが大活躍した先日の悪魔討伐実習ですわね」

「黙って見なさい」

映像の中、聖奈は百匹の悪魔たちに取り囲まれていた。

しかし怯えや恐怖は皆無。それどころか愛らしい美貌には微笑みすら浮かんでいる。

『さあ、掛かってきなさい、醜く穢^{けが}らわしい弱小悪魔共。この美しき御光聖奈が、まとめ滅菌消毒して差し上げますわ!』

父から贈られた聖なる剣をかざし、母から贈られた光の盾を構えて攻撃態勢を取る。ギンツと煌めく碧眼は、視界の中に敵の姿をロックオンしている。

『ギイイイツ! ガキ天使の分際で。生意気だあああつ!』

『やっちまえええつ!』

一斉に飛びかかる悪魔の群れ。それはまるで黒い津波であった。

『神の聖なる裁きを受けなさい！ てつりやあああああつ！』

太陽を背に受けて大きく振りかぶった後、聖剣ファルシオンを振り下ろす。

ガッ！ ガッ！ ガッ！

光り輝く槍が悪魔の群れの鼻先に撃ち込まれた。が、命中したわけではない。

『なんだ？ 外しやがったぞ』

その間に、次の光槍が今度は悪魔群を飛び越えて後方に突き刺さる。

『また外れた。口先だけかよ』

『防御はともかく、攻撃はからつきしだな』

悪魔たちの嘲笑に構わず、聖奈は剣をさらに振り続けた。ガッガッガッと連続で放たれた槍は円周状に悪魔の群れを囲む。

『それはどうかしら』

キュイイインッ！

光杭から青い光が立ち上がり、それは障壁となって悪魔軍団を閉じ込めてしまった。

『ウフフ、これがわたくしの美しい方程式の解ですわよっ！ くらいなさい、今必殺の、エンジェリウム光線ッ！』

七色に輝くファルシオンの切っ先から……。

ブッシュウウウウウ………ツッ！

『げえええええつ、なんだこれは！ ガスだとおお！』

『光線じゃねえし！ い、息ができねえつ』

『おおおお……ど、毒ガスだあああああつ！ ぐぎゃあああああつ！』

『ぐわああ……だ、出してくれえつ！ サタン様、お助けええええつ！』

「オホホホッ！ その境界の中で神の裁きをたっぷり味わいなさい。少しばかりスパイシーな味だと思えますけど。オホホオツ」

嘲笑と共に白い煙が悪魔軍団を包み込み、そこは阿鼻叫喚の地獄絵図と化した。地獄だ
けに……。

「はい。ここまで」

「何か問題でも？」

「天国地獄協定第二条、大量殺戮兵器に関する天界条約、その他色々二十数件の違反……
そもそも、なぜ聖なる剣ファルシオンから有毒ガスが出るんです？ なぜ天使に相応しい

聖なる力で闘わないのですか？」

樹利亜の声が微かに震え、こめかみがピクピク痙攣けいれんしている。

「なぜって……最も合理的かつ効率的な方法を選んだだけですわ……それに……成績優秀なわたくしが停学なんてあり得ません！ これまでも、わたくしがクラスで一番多くの悪魔を倒してますわ」

「いくら成績がよくても、内容が悪すぎます。貴女は栄光ある御光家の一人娘なのですから、それに相応しい闘い方をしなければなりません。お父様亡き今、御光家の跡を継ぐ貴女の責任は重大なのです」

「ううう……お母様……御免なさい……そ、それじゃやっぱり停学に……」
ガクツと膝から崩れ落ちる聖奈。脳内で描き続けた夢のプランがガラガラと音を立てて崩れていく。

「ですが、私も鬼ではありません。貴女にチャンスを与えましょう」
スツと眼鏡の位置をただし、感情を押し殺した流し目が娘を見る。

「補習を受けてもらいます」

「補習？」

「そう、今から人間界に降りてもらい、ある人間を警護してもらいます」

「……人間の警護……？」

明らかに不満そうに表情を曇らせる。エリート街道を走ってきた彼女にとって、人間界は左遷に等しい辺境なのだ。

「ただの人間ではありません。将来人間界の救世主、メシアになる可能性がある人間です。当然悪魔も狙ってきますから排除すること。ただし周囲に被害を出さないように。一人でも人間を殺したら即失格ですから」

「じ、十人くらいはいいんじゃないですか？」

「ダメです。あなたの力は間違った方向に強大すぎるのです。少しは力を抑えることを学びなさい」

「うう……人間なんて百億もいますのに……お母様のケチ……」

「やるんですか、やらないんですか？」

「や、やります！ やらせて頂きます！ 御光聖奈、全力でメシアを警護し、御光家の汚名を挽回してみせますわ！」

ピシッと敬礼。多少の不満はあろうとも、これを使い越えればエリートへの道へ復帰できるのだ。気力が乗り移った白翼がパタパタと羽ばたく。

「名誉挽回ですけどね、さあ、いつてらっしゃい！」

ぱああんつと背中をはたかれた瞬間、

「きゃあああつっ！」

床に穴が開き、聖奈の身体は地上目がけて真っ逆さまに落ちていった。

「さて、どこまでやれるかしら」

聖奈がいなくなった後、樹利亜は眼鏡を拭きながら呟く。候補者が実際にメシアとして覚醒する確率は数百万人に一人であり、ほとんどの場合徒労に終わるのである。非常に分の悪い賭けだと言えた。

「このまま用済みとなるのかしら」

引き出しを開ける。中には銀色のタバコケースがあった。家族の前では吸わないようにしてきたのだが……。

「でも……彼女なら或いは……」

しばらく思索した後、そのままパタンと引き出しを閉じた。

「えーと、ここね。乾優斗……順位二五六番目の候補というのが気になりますけど、まあ、この際何でもいいですわ」

古アパートの部屋の前に立ち、勢いにまかせてピンポンを十六連射した。

「というわけで！ 今日からあなたを警護することになった……」

「……………」

自己紹介の途中、ヌツと顔を出したのは五十代と思われるランニングとブリーフ姿のずんぐり肥え太った中年男だった。禿げ寸前の頭に未練がましく頭髪をバーコード状に張り付け、ダサイ黒縁眼鏡の奥に細い目が澱んだ光を浮かべている。

「……御光……聖奈……ですわよ……」

「……………」

「だから……あなたがメシアとして……わたくしと契約を……」

「……………」

「……………」

「……………」

無言のまま、聖奈をじくじくと見つめる。脂ぎった浅黒い身体からは饂餹^すえた汗の匂いが押し寄せてきて、どんなに抑えようとしても胃の底から嘔吐^{おうと}感^{かん}を呼び起こす。

「こんなの無理！ 無理無理無理無理無理無理無理無理いいっ！ チェンジッ！

チェンジですわッ！」

踵^{かかと}を返して外に出ようとしたとき――。

「はあつはあつ！ 待って天使たんっ！ はああああ、てえ〜んしちやあ〜ん！」
どういう仕組みなのか。ジャンプした瞬間、シャツもブリーフも脱ぎ捨て、中年男は全裸になっていた。

「きゃあああああつ！」

予想を超える動きで背後から抱きつかれて、さすがの聖奈も対応できない。二人はもつれるようにおんぼろキッチンの床に転がった。

「待っていたんだよお、君のような可愛い天使が押しかけてくるのをっ！」

「ちよ、ちよつと、お待ちなさいっ！ 何をしますのよっ！ あなた本当にメシアですのっ？」

上にのしかかったまま、尖らせた男の唇が急接近してくる。その姿は、まるで巢に掛かった蝶に襲いかかる邪悪な毒蜘蛛だ。さらに勃起した男根がスカートほつきを捲り、太腿の辺りに擦りつけられてくる。

「いやあああああつ！ 穢らわしいっ！ この変態っ！ 消毒ですわあ！」
無我夢中で振り上げた膝が男の急所を直撃した。

「はうあつ！」

グシャアアアツと妙な音がして、中年男の顔色が緑色に変わる。

「からのつ、アークバスタアアアアアアッ！」

ザシユウウツツ！

怯んだ隙を見逃さず、聖なる光に包まれた渾身の手刀が、中年男のイチモツを根元から切斷した。

「くおおお……なんとというご褒美しい……っ！」

男は白目を剥いて絶叫するが、なぜかその顔は歡喜に満ちていた。

「ハアハア……下等な人間の分際でわたくしに触れるなんて、万死に値しますわよ……
って……あれ？」

だが高貴なエリート天使の光刀の威力はそれだけでは収まらない。ピキピキと頭から股間まで亀裂が走ったかと思うと、男の身体はハムのように左右に分斷され、ドオツと真つ二つになって崩れ落ちる。

「ひいっ！ ま、待ちなさいっ！ 今のは正当防衛。ノーカン、ノーカンですわあ！」

フワフワと、今にも飛び去ろうとする男の靈魂をガシツとつかむ。

「と、とにかく生き返りなさい！ ホーリーライトオオ！」

魔法を唱えると、醜い男の身体は一瞬にして元の状態に復元された。

「うりゃあつ！」

その胸の上に靈魂を置いてズンツと踏みつける！ 魂は肉体へと戻り、見る見る肌の血色もよくなつていく。どうやら蘇生は間に合つたらしい。

「ふう、こんな男がメシアとは思えませんわ……きつと何かの間違い……」
疲れ切つてフラフラと部屋を後にする聖奈。

「ンンツ？」

閉じたドアの表札を見て二度見する。そこには『州器以蔵』と書かれていた。

「え……人違い……？ じゃあ、本物のメシアは？」

慌てて周囲を見回すと、隣の部屋の表札が目に入った。

「あ……」

「気を取り直してっ！ 今日からあなたを警護することになった守護天使、御光聖奈ですわ。十万十七歳の超エリート美少女天使よ。みすばらしい人間のあなたを守ってあげるのだから、ありがたく感謝して契約なさい」

「えええ……」

いきなり土足で侵入してきた少女に宣告され、乾優斗は食べかけのカップ麺をこぼしそうになった。その間に少女はズカズカと上がり込み、制服の生徒手帳を確認している。

「ふむ……乾優斗、清風学園二年生。間違はなく本物つ……中肉中背、顔も普通つてとこね。まあいいですわね」

生徒手帳を用済みとばかりぽいっと放り投げる。

「今からここを対悪魔の前線基地とします！ とりあえずお腹が減りましたし、兵站の確保が急務ですわね」

「はあ……そうですか」

（これは夢？ それともドッキリ？）

優斗は目を擦っては瞬きを繰り返す。何が何やら、さっぱりわからなかった。いきなり現れた金髪碧眼の少女が、意味不明なことを喚わめき散らしている。美人なのは間違いない。だがおかしな人物であることも間違いなかった。

見た目は自分より若干年下に見える。頭のリングや背中の中翼は、確かに彼女が天使だということを手張している。だがしかし、単なるキ……いや勘違いコスプレイヤーという可能性もある。

（警察に……いや救急車を呼ぶべきだろうか……）

「何をぼーつとしてますの！ わたくしがお腹が減ったと言ったら、食事を用意するものでしょう。はあ、やっぱり人間って使えない下等生物ですわね。言っておきますけどわた

くしは超エリートの美少女天使ですので、そんな犬の餌のようなモノは口にしませんから、さっさと何か作ってきなさい」

色々考えていると自称少女天使がキャンキャン喚き始めた。腹をすかせたスピッツとかこんな感じだろうか……。

「いや、急に言われても何もないよ」

「あなたは脳みそ空っぽなのかしら？ なければ買ってくればいいでしょう」

わざとらしく溜息をついて、哀れむような視線を優斗とカップ麺に送りつける。失礼とか不作法とか、そういうレベルではない。彼女は何かが根本的に欠落し、ズレている。

「そもそも……なんで僕が君の世話をしなくちゃならないんだよ」

「……あなた、口答えをしましたわね……エリート天使のわたくしにつ……下等な人間の分際でえ……ッ」

ピクピクとこめかみの血管が脈打ち、碧眼がギラリと煌めく。

「懲罰をくらいなさい！ はあああつ、アークバスタアアアアッ！」

「あ……」

パシッと平手が振り下ろされ、優斗の手からカップ麺をはたき落とす。カップはナイフで切ったように綺麗に両断され、琥珀色のスープやネギや麺がスローモーシヨンのように

ゆっくりと派手に飛び散った。

「ホホホッ、ご覧になりましたかしら。これぞ正義の鉄槌……」

「こらあああつ！」

「ひっ！」

「ダメじゃないか、食べ物を粗末にしちゃあ！ 女の子でも、ゆるさないぞ！」

思わず大きな声で怒鳴っていた。普段はそんなことはしない優斗なのだが……。

「そんなに怒らなくても……あ、ああ……っ」

急にふらついたかと思うと、そのままゆっくりと倒れ込む。

「ど、どうしたのっ!？」

慌てて優斗が抱き留める。顔色が悪く、頭のリングがピコン、ピコンと明滅していた。

「あうう……お腹がすいて……もうだめ……力が……抜けて……」

「お腹が!？」

「わたくしたち天使は……地上界では大量のエネルギーを……必要としますの……ハアハ

ア……ここに来るまで……モンスター(?)と闘って……消耗してしまったの……ハアハ

ア……だから早く……」

ピコン！ ピコン！ ピコン！ ピコン！ ピコン！ ピコン！

「わ、わかったから、待ってて」

急かすように点滅が速くなり、台所へ飛んでいく優斗。冷蔵庫を物色してみたが、あいにく卵くらいしかない。

「仕方ない、これでなんとか……」

そして三分経過。

「ごめん、こんなのしかできなかつた」

湯気を立てる黄色い厚焼き卵がテーブルの上に置かれている。

「クンクン……あら……いい匂い……」

ほんのり甘い匂いと鮮やかな黄色についた茶色い焦げ目が食欲をそそる。ヨロヨロと起き上がった聖奈だが、箸の使い方がわからない。

「うう……なんですのこれは……?」

「それは箸だよ、こうやって使うんだ」

教えようとしたけれど、聖奈はすぐに箸をポロリと取り落としてしまう。

「もういいから、あなたが食べさせなさい」

アーンと、ひな鳥のように口を開けて待っている。

「仕方ないな」

ひとかけら
一欠片口に運んでやると、パクツと飛びつくように食べる。

「ん……む、む……なに、これ……」

「卵焼きだけど。口に合わなかつた？」

「んむ……タマゴ焼き……ふむっ……庶民にしては……はむっ……まあまあ……ぱくっ……ですわね……もぐもぐ」

文句を言う割にはどんどん食べる勢いが加速していくので、優斗はせわしなく箸を動かしてせっせと卵焼きを運んだ。そしてあつという間に卵三個分の厚焼き卵は消失した。

「ふう、エネルギー補給完了ですわ」

「口に合つたようでよかつたよ」

「むっ……そ、そんなことありませんわ。に、人間の食べ物なんて天国料理に較べれば……」

……中の……上くらいよ」

「ハイハイ。そうですか」

面倒くさそうなので突っ込まないことにする。

「とりあえず、食料も確保できましたし、今後も安心ですわね」

「え……それはどういう？」

「フフフッ！ 罨に嵌まりましたわね！ 乾優斗！ では、これで契約成立ということだ」

さつきまでの衰弱がウソのように、天使少女はリングを輝かせてニッコリ微笑んだ。

「えと、御光さん……だっけ？」

ちゃぶ台の向かいに座った少女をしげしげと見つめる優斗。

「聖奈で結構ですわ。ではここにサインをしなさい」

「なんで料理作らされたうえに、契約までさせられてるんですかね……」

「天使の高貴なる唇に、初めて地上界の料理を食べさせたのですから、当然責任を取ってもらいますっ」

「えええ……っ!？」

「あなた方の法律にも、一度飼うと決めた生き物は最後まで責任を持って飼育しなければならぬと書いてあったはず。フッフ、これが知略というものですわ。オホホホ」

鬼の首を取ったように勝ち誇る天使少女。それはペット用の規則なのだが……。

「まあ……本人が気にしてないみたいだから、いいのかな……?」

渋々契約書にサインをしようとしたとき、ピンポンと呼び鈴が鳴った。

「こんな時間に誰だろう?」

聖聖人人闖入者のこともあり、いぶかりながらドアに近づく。

「ッ！ 優斗、いけませんわッ！」

何かを感じ聖奈が立ち上がるが……。

「どなたですか？ つて、うわあああああッ！」

ザンツッ！

いきなり目の前でドアが真つ二つに切り裂かれ、尻餅をつく優斗。

「そなたがメシアか」

玄関には漆黒のビキニを纏まとった銀髪赤眼の少女が、巨大な鎌を構えて立っているではないか。

「妾が直々に始末してくれよう。有り難く思うのじゃ」

ギンツと赤い瞳が鋭い光を放つ。唇の端からは小さな牙が、愛らしくも凶悪に伸びているのが見えた。

「お待ちなさい、この薄汚い悪魔！」

「おや、守護天使がおったのか」

金髪の天使を見つけてニヤリと微笑む。無垢で無邪気な笑顔の裏には、それ故の残虐性が潜んでいる。

「天使狩りのついでに寄ってみれば、思わぬ余興じゃな」

コウモリのような翼をふわりとはためかせると、そこから何か黒い塊がドドツと転がり出てきた。なんとそれは血も滴る天使たちの生首であった。

「う、うわあああああつ！」

優斗は胃液がこみ上げるのを感じて口を押さえた。苦しみか痛みか、生首の顔はいずれも歪みきり、この世のすべてを呪うような恐ろしい形相である。この残虐行為を、目の前の可憐な少女がやったというのだろうか。

「う……これは……力天使……？」

無駄に自信に溢れていた聖奈の顔が僅かに引き攣る。力天使と言えば聖奈たち普通の天使より遥かに格上の存在なのだ。

「そやつらでは喰いたらんでな。デザートにメシアでもと思ったが、そなたのような生娘天使を喰うのも悪くないのお」

ペロリと唇を舐める少女。短い銀髪ツインテールは洋犬の耳のように愛らしく、その根元には赤い角が左右一本ずつ生えている。漆黒のビキニが包む身体は胸も平坦で、くびれの少ない腰には鍔やじりのような黒い尻尾が生えている。身長はかなり低く、腕や太腿も華奢きゃしゃで、幼げな印象は聖奈よりも年下に見えるのだが、ただ者ではないのは明らかだ。上目遣いに見つめてくる赤い瞳は、明らかに聖奈を挑発している。

そして身に余るほど大きな鎌は赤い刀身を鈍く光らせ、すべてを切り裂く凶悪なオーラを纏っていた。

「メシアには手を触れさせませんわ。この超エリート美少女天使、御光聖奈が返り討ちにしてくれます。わたくしの輝かしい未来のために、醜い悪魔は滅菌……」

「フンッ！」

構わずビュンッと鎌を振り下ろす銀髪少女。血を塗ったように赤い刃が、優美な光跡を描いて少年の首へと迫る。

「人の話を聞きなさいっ！」

最大加速で二人の間突っ込み、凶刃を盾で防いだ。

「う、うわあっ！ 聖奈、な、何、これ!？」

「逃げなさい、優斗！」

「ほう、思ったより速いな。少しは楽しめそうじゃの」

コケティッシュな笑みを浮かべる幼い悪魔少女。陶器のように白い頬には、温もりや血の気がまったく感じられない。

「フン、余裕ぶっていられるのも今のうちですわ、光戦フォームッ！」

キュウンッと頭のリングと翼が輝きを増す！ 聖奈の手に光の粒子が収束し、一瞬にし

て聖剣が出現した。

「悪魔なんかわたくしの敵ではありませんのよ！　すべての悪魔を切り伏せ、メシアを守る、それがわたくしの使命ですの！　てりゃああつ」

ビュンツツ！

横なぎに一閃するが、銀髪悪魔少女の姿はもうそこにはない。床に後頭部がつくほど背中を反らして、あつさりと回避。

「我は七大魔王が一人ベリアル。見知りおけ」

「ベリアル……!？」

「そうだ。天使もメシアも神も、すべて殺戮する！　見習い天使風情が、妾と邂逅した不幸を呪うがよいッ」

その体勢のまま、大鎌の斬撃が伸びてきて、聖奈の脇腹を斜め下から切り裂く！

ザッシユウウツツ！

「ぐうあつ！」

「せ、聖奈ツ!？」

強烈な鎌の一撃に、鮮血が迸る。突然の惨劇に優斗は足がすくんで動けない。

「もう終わりか？　つまらぬ。さて次はメシアじゃ……」



「ぎゃあっ！」

肘、膝、トドメのハイキック！ あっという間に五人を叩き伏せた。

「聖奈、あれは……」

「え？」

昏倒している不良少年の首筋に、小さなフジツボのようなモノが付着している。

「これは……悪魔の使い魔ですわね」

気がつけば周囲はセピア色の風景へと変わっている。悪魔の結界に学園全体が取り込まれているようだ。

「じゃあ、悪魔に操られているってこと？」

戸惑う間に不良たちがユラリと起き上がった。意識はないまま、身体だけが動いている感じで、まるでゾンビのような不気味さだ。

「彼らを相手にしても意味がないわ。念波を辿って元を叩きますわ！」

「待ってよ、聖奈」

脱兎の勢いで駆け出す天使少女を追って、優斗も走り出す。

「やあ、聖奈たん、ボクに会いに来てくれて嬉しいよお」

体育倉庫の中にソイツはいた。非常勤講師、州器以蔵。明かりのない、暗室のような真っ暗な倉庫なのに、州器以蔵の容姿は赤い燐光を纏ってクッキリ浮き上がって見えた。

「あなたが……？」

強力な悪魔が待ち受けているかと思ったら、醜い禿げの中年デブ男である。

「悪魔に憑依されてるのね。はあ、拍子抜けですわ」

「むふふ……ボクは君に相応しい男になったんだよお」

何の脈絡もなく、いきなりズボンを下ろす。デロンとナマコのような肉棒と重たそうな陰囊いんのうが垂れ下がっている。

「きゃああつっ！　なんてモノを見せますのよっ！」

慌てて顔を背けて目を隠す。直視はしていないが、人間とは思えない巨大さ、そこから漂う闇のオーラは、悪魔がそこに憑いていることを示している。

「はあつはあつ！　聖奈たん、大好きだあああつっ！」

下半身丸出しのまま、猛ダッシュ！　クネクネと怪しい動きで飛びかかってくる。

「聖奈、油断しないで」

「わかってますわよ。こんなヤツは滅菌消毒ですわっ！」

光戦フォームに変身し、聖剣を構えて迎撃しようとする聖奈。

「うおおおつ！ マジ天使だあああつ！」

興奮した州器の股間から、ペニスが槍のように伸びてきた。なんとという下品な攻撃か。

「穢らわしいモノ、近づけないでつ。アークバスター！」

スパアアアアアッ！ 鋭い斬撃がペニスを縦一直線に切り裂く！

「うひよおおおおつつ！ 聖奈たんのご褒美つ！ 最高おおおおおつ！」

ぶつしゃあああああつ！ どびゅどびゅどびゅうううつ！

「きゃあつ！ イヤアアアアアアアアアッ！」

血液の代わりに噴き出したのは白濁した粘液である。それをまともに頭からかぶつてしまい、全身が異臭粘液でベトベトになってしまった。

「もう、変態すぎつ！ なんですのよ、これはっ」

「もちろんボクちんのザーメンだよお。聖奈たんのために、一週間オナ禁していたからねえ、たつぷり溜まっているんだよお。うひ、うひひひっ」

狂ったような嗤いを浮かべながら、ジリジリと近づいてくる丸出しの中年男。

「よくもわたくしに、そんな汚いモノを……って、あれ？」

反撃しようとするが、粘液が粘りついて身体を自由に動かせない。そればかりか、エネルギーが急速に失われていくではないか。

「ぐぐつ、動けない……ど、どうして……こ、これしきの事で!？」

「うひよおおつ! 聖奈さんは、ボクのお嫁さんなのだあ!」

二本に分かれた触手ペニス、鞭のようにしななって伸びる。

ビシッ! バシイッ! ピシイッ!

「うあつ、きやああつ! やめなさいいっ! あうっ!」

白い肌にミミズ腫れを無数に刻まれていく。ダメージもあるが、打撃のたびに不潔な先走り汁を塗りつけられるのが屈辱的だ。

ピコン! ピコン! ピコン! ピコン! ピコン!

エネルギーも吸収されているのか、早くも頭上のリングが明滅し始める。

「聖奈! あぶないっ」

ドカアアアアッ!

助けようと飛び込んだ優斗だが、鞭の一撃で軽々と吹き飛ばされてしまう。

「はい、ザコお。うひひひっ」

黒縁眼鏡を光らせて、優斗に優越の嘲笑を浴びせる州器。

「よくも、優斗に……ッ!」

それを見た聖奈の碧眼が大きく見開かれた。怒りのあまりツインテールが逆立ち、全身

からゴオツと噴き出した闘気で、へばりついていた白濁粘液が吹き飛ばされていく。

「何を言っているんだい、聖奈たん」

ササツとゴキブリのように素早く床を這った州器が、優斗を背後から羽交い締めにする。その手には大きめの肉切り包丁が握られていた。

「ボクはこの勘違い野郎を殺して、聖奈たんを助けるんだよお」

「ふざけないで！ 勘違いしているのはあなたでしょうッ」

「ンン……かわいいそうに……こいつに騙されているんだねえ……洗脳？ それとも催眠かなあ？」

州器の眼にギラリと狂気の光が宿る。歪んだ口元からは歪んだ妄想と共に、涎が垂れ流しになっている。

「その呪縛から解き放ってあげるよお！ 救世主であるボクがねえ！」

振りかぶった肉切り包丁を優斗の首に振り下ろした。

「させませんわっ！」

ザシュツツ！ 一歩早く踏み込んだ聖奈の剣が、州器の腕を斬って撥ね上げた。絶叫と共にどす黒い血が大量に噴き出す。

「ぐぎゃあああつ！ う、腕がああああつ！ せ、聖奈たん……ハアハア……どうしてえ

……うごごご……ボ、ボクという恋人がいるのに……どうじて、そんな男にいつ

負傷した腕を抱えて床を転がり回る変態教師。血まみれの身体からは血液だけでなくおぞましい闇のオーラが毒の沼のように広がってくる。取り憑いた悪魔に魂まで完全に侵食されている証拠だ。

「あなたはもう人ではなく悪魔。ならばッ、汚物は消毒してあげますわ」

ファルシオンを構え距離を詰めていく。フツと息を吐く。青い瞳は静かに、激しく怒りの炎を灯している。

「ひ、ひいっ！ ボクを殺すつもりい!! 恋人であるボクを！」

「お黙りなさいっ！ はああああっ！」

ザンツッ！

剣から放たれる聖なる光が、州器の身体を袈裟懸けさがけに切り裂く！

「くはあああっ」

白目を剥いてドオツと仰向けに倒れ、手脚をピクピク痙攣させる。

「憑依した悪魔だけを斬りましたわ。その腕の傷は悪魔に魂を売った罰として心と身体に刻みなさい」

あっさりと片付けて、優斗の方に駆け寄ろうとした時……。

「優斗、大丈夫……うぐっ！」

何かが背後から首に巻き付き、強烈に締め付けてきた。それは州器の触手ペニスではないか。

「くうああっ……な……あ、あなた……」

「残念、そいつは質量を持った残像なのだぁ！」

バリバリバリバリエイツ！

「きやああああっ！」

叫ぶやいなや、強烈な電撃が放たれて、聖奈は転倒させられた。

「ぐっ……こんなことって……ザコ相手に……わたくしが……」

「うほほおっ！ くらいなよお！」

ドビュルツ！ ブビュルルルルウウツ！

「きやああああっ！」

再び顔射をぶっ掛けられて、眉間を撃ち抜かれたように仰け反る聖奈。先程よりも熱く濃く、さらに臭い。

「うあああ……ち、力が……抜ける……あああ……どうして、こんな人間なんか……」
悪魔の力はほとんど防げるハズなのに、この男の攻撃はなぜか無効化できない。酷い脱

「んん？ ちょっと黙ってもらおうかなあ」

州器の股間からさらに触手ペニスが伸びてきて、聖奈の身体にギリギリと巻き付いてくる。そのうちの一本、一際大きな肉棒触手が口元に迫ってきた。

(な、なんですの、これ!!)

おそらく本体なのだろう。奇怪で凶暴な淫肉棒でありながら、亀頭部は包皮を被っているのではないか。アンバランスな造形は身の毛がよだつほど気味が悪く、地獄の怪物を見ているようだった。

「うへへ、まずは前戯のフェラチオからだねえ」

興奮が海綿体を伝わって亀頭をさらに膨れ上がらせた。包皮がズルリと剥け返り、赤紫色の亀頭が露出する。

「う、ううっ……く、臭いっ！ 汚いモノ、近づけないでっ！」

見た目もさることながら、こびりついた大量の白い恥垢から、生ゴミのような腐臭が漂ってくる。見ているだけで酸っぱいモノがこみ上げて、吐き気を催してしまう醜悪さだ。

「恋人同士なんだから、遠慮しないでいいんだよ」

「馬鹿馬鹿しい！ あなた、頭おかしいんじゃないじゃないのっ！」

危機を察知した聖奈は、顔を思い切り捻り、唇をきつく噛んで侵入を許さないようにす

るのだが……。

「お口を開けないと、こうだよ」

バリバリバリエイイツッ！

リングに噛みついた顎。ペニスから電撃が放たれる。明滅するリングは天使にとって重要かつ、敏感な器官なのである。全身を貫く衝撃に、絶叫が迸った。

「きゃああああっ！ うくっ……んぐぐぐうっ！」

思わず唇が弛む。その隙を突いて、不潔な包茎触手ペニスが唇に潜り込んできた。

「ひいいいいいっ！」

（いやああああっ！ 臭いっ！ 汚いっ！ 臭い！ 汚いっ！ 汚いっ！ 汚いっ！）

目を白黒させて悶絶する聖奈。男のモノを口にくわえるなど、天使にとっては信じられない変態背徳行為である。それに加えて舌の上に広がる塩辛い味と、ツーンと鼻を突く強烈な腐敗臭が、汚辱感を煽った。

「おおっ、聖奈さんの唇ゲットオオッ！ んんおお、うほおっ！ 天使の唇って、メチャクチャ気持ちイイイイイツッ！」

一方の州器は悦楽の表情で、雄叫びを上げている。学園屈指の美少女、しかも天使だというのだから、嬉しくないはずがない。

「はああつ、生まれてずっと包茎だったからねえ。一つ上の悪魔になってよかったよ。うへへ、四十五年間熟成されたチンカスを味わってねえ」

ジュブツ！ ズブツ！ ジュブツ！ ズブブウツ！

「うぐうつ！ んおおつ！ ひやめ……むふう！ おおお……くふううつ！」

抜き差しされる肉触手が顎を押し広げ、舌を巻き込みながら喉奥へ達する。あまりにも大きくて、噛みつくこともできず、思うままに蹂躪されてしまう。ピストンのたびに亀頭から四十五年の恥垢が剥がれ落ちて、舌の上に塗りつけられるのもたまらなかった。

（いやいやあつ！ きたないっ！ くさいいいっ！ な、何ですのこれえ！ 何がしたいのよおつ！）

生殖行為ではない、ひたすら屈辱と恥辱を味わわされ、天使のプライドはズタズタに引き裂かれていく。嘔吐感が何度もこみ上げて、逆流する胃液で膨らんだ喉が苦しそうにピクピクしている。

「ハアハア！ オオオツ！ も、もう……ヤバイイイツ！ ハアハアアア！」

州器の呼吸が荒くなる。芋虫のような手指が金髪ツインテールをつかんで、美貌を股間に引きずり込む。

（うう……ま、まさか……!?!）

口の中で亀頭が大きく膨らむのを感じて、聖奈の背中に鳥肌が立った。間違いない、この男は聖奈の唇に射精しようとしているのだ。

(そ、そんなの、絶つ対つに、いやですわあつ！)

なんとか逃れようと首を振ろうとするが、髪をつかまれているはそれもできず、慌てた口腔粘膜の蠢きはかえって男を悦ばせてしまう。

「ふおおおおつ！ まずは一発ううつ！ 聖奈さんの唇にい！ おりゃあああつ！」

どびゆるるるつつ！ ぶじゆるるるるつ！ どぶどぶどぶううつ！！

「んぐうう~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ツツ！」

(いやあああああああつ！)

夥しい邪精が恥垢と混ざって口中に溢れ返り、腐った生卵のような汚辱感と鼻を突く生臭い匂いで、気が狂いそうになる。

「全部飲むんだよおお、聖奈たん」

グググツと深く突き入れて、聖奈に飲ませようとする州器。聖奈は小鼻とほつぺたを膨らませたまま小刻みに首を振り、断固拒絶しようとする。

「飲まないとアイツがどうなるか、わかっているよねえ」

だが州器は卑劣にも人質を使って脅迫してきた。

「ふむぐぐつ！ ひ、ひひようものお……お、おお、おおおうつ！ のめばあいんれしよおつ！」

（優斗のため……頑張るのよ）

聖奈は毒を飲む覚悟で舌を動かし、屈辱汚精を食道へと送り込んでしまう。

「うう……ごくつ……ごくうつ……んむ……ごきゅつ……ごきゅんつ！」

（ひいひいっ！）

あまりのまずさに白目を剥く聖奈。重く粘っこのドロドロ精液が、食道を引っ掛かりながらゆつくりと下っていき、ついには胃の中へ落ちる。猛烈な嘔吐感で全身の毛穴からいやな汗が噴き出すと同時に、ザワツと産毛が総毛立った。

「お、おお、聖奈たん！ おおおお、おおううう」

どぷつ！ どびゆるるつ！ どくどくどくうんつ！

その後も長々と射精は繰り返され、それを聖奈は無理矢理飲まされてしまう。

「んふつ……ううう……ごくつ……ごくんつ……むふぐう」

（ううう……お、多すぎますわあ……あああ）

眼の端に涙の粒を光らせながらも、優斗のために必死に飲み下す聖奈だった。

「ハア……ハア……お、おええ……ま、満足したでしょう……優斗だけでも……解放しなさい……ゲホッゲホッ！」

優斗は粘液で柱に縛り付けられていた。意識はなくガクリと頭を垂れている。

「んん、彼にはまだ、もう少しだけ付き合ってもらおうよ」

うそぶきつつ、聖奈の方に向き直る。股間の触手ペニスは、射精直後とは思えないくらい元気にうねっていた。

「これからアイツの前で聖奈さんの処女をもらうんだからね。ボ、ボクも童貞だから、ちようどいいよね」

「そんなの、絶対にイヤですわ！ あなたに犯されるくらいなら、死んだ方がマシですわッ！」

「生意気言ってるけど、もうエネルギーはほとんどないんじゃないかな？」

ピコン……ピコン……ピコン……ピコン……ピコン……

「うう……」

州器の言うとおり、ひび割れたリングの明滅はテンポが遅くなり、光度も落ちていた。身体に力が入らず、まともに闘える状態ではない。

「そおれっ」

手脚に絡みついた触手が聖奈の身体を持ち上げ、両膝を伸ばしたまま両腕を後ろに伸ばした屈伸状態にさせる。光翼も背中に伸ばしたまま顎触手に噛みつかれて、動かせなかった。

「ああ、可愛いよ、聖奈たん」

背後に取り憑いた州器がスカートを捲り上げた。純白のショーツがピッタリと張り付き、健康的なヒップの形を立体的に浮かび上がらせている。熟れるのはまだまだ先だが、初々しいフレッシュユさが魅力だ。

「ううっ。見ないでっ！ 触らないでっ！ この変態悪魔っ！」
肩越しに鋭い視線を送りつけるが、中年男は相変わらずニヤニヤしている。

「ああ、いいねえ、それ。ツンデレの伏線だよ。さすが聖奈たん、わかってるわあ」
触手ペニスの群れの中心から、一際大きな肉塊がヌツと生え伸びる。先程唇を犯した本体の触手ペニスだ。射精したせいかな、また皮を被っている。

「聖奈たん、ハアハア……見せてもらうよ」

ショーツをつかんで、一気に太腿にまで引きずり下ろす。

「ハアハア……これが聖奈たんのオマンコ……ハアハア」

眼鏡の奥で細い眼をぎらつかせる悪魔教員。二つの尻肉に挟まれて、クレヴァスはひっ

そりと慎ましく口を閉ざしていた。金色こんじきのヘアも恥丘を申し訳程度に飾っているだけで、後ろからはほとんど見えない。

(う、うう……なんとという屈辱ですの……っ)

屈辱に唇を噛む。悪魔との闘いで純潔を散らす天使はたまにいるし、覚悟もできていた。だがよりによって、こんな醜い半人間の中年男に処女を奪われるなんて、思ってもいなかった。

(優斗……)

なぜか彼の顔が臉の裏に浮かんだ。理由はわからないが、とても悲しく、悔しく、惨めな気持ちだった。それは天界にいたときには感じたことのない感覚だ。

「ハアハア、カワイイよ、聖奈たん。やっぱりボクの天使だよお」

背後から顔を尻の谷間に埋めるようにして、花園にむしゃぶりついてきた。

「ひゃうっ！ な、何をしますのッ！」

「今度はボクがお返しする番だよ。むふううっ、いい匂いだあ」

思い切り深呼吸した後、州器は長い舌を陰唇の隙間にねじ込んでくる。

ピチャ……ピチャヌチャ……クチュツ……ピチャアアッ！

「うあああああっ！ や、やめなさい！ 馬鹿ああっ！ そ、そこは……舐める所じゃあ

……あああああ~~~~んっ！

小さな肉突起を舐められた瞬間、稲妻のような痺れに身体を中心に貫かれて、はしたない声が漏れてしまった。

(今のは……なんですの……!?)

「ソッフ、聖奈さんは、クリトリスが敏感なんだねえ」

「はあはあ……ううっ……そんなことありませんわ……あふっ……もう舐めるなあ！」

性に関して知識としてはあるものの、基本的に初^{うぶ}な処女天使なのである。これほどの性感帯があることに、戸惑わずにはいられない。

「むふふ、聖奈たあん、チュツチュしようねえ」

ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ……

一度吸い付いた州器の唇は執拗で、腰を振ってもまったく離れない。まるで毒蛭に吸い付かれたようなおぞましさだ。

「んんっ……もうやめ……ンはあっ……ああっ……し、しつこいい……ああうっ！」

ビリッビリッと電流が可憐な女芯に突き刺さり、恥骨を貫通して子宮にまで響く。キュウンッと痛みにも似た疼きが、下腹いっぱい満ちてゆく。

「むひひひ、おいしいよ、聖奈たん……くちゅくちゅ……天使のオマンコ、とつても甘い

……あああ……それになんていい匂いなんだあ……ぺろぺろお」
自らの肉棒を扱きながら、舌先を膣孔にも潜り込ませてくる。

ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ……

（うああああ……なんですのよ……このくすぐったいような、変な感じは……ああ……身体が熱くなつて……頭が……ボウツとして……）

うなじに汗がじつとりと染み出し、呼吸が乱れてくる。こんな肉体の反応は生まれて初めてで、混乱するばかりだ。

「ふひひひ。ボクの唇が気に入ってくれたみたいだねえ。クリちゃん完全勃起で、オマンコも濡れてきたみたいだよお」

それまで閉じていたサーモンピンクの花びらが、充血して開花させられていた。陰核も包皮を剥かれて頭をもたげ、受粉を待つ雌しべのようだ。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……ううう」

聖奈は荒い呼吸を繰り返しながら弱々しく首を横に振る。実は先に飲まされた州器の精液の催淫効果によるもののだが、潔癖な処女天使が気付くはずもない。

「むふふふう、カワイイ聖奈たん。それではそろそろ……ボクと一つになろうね」
握り締めた異形男根が聖域に迫り、仮性の包皮がズルンツと剥け上がった。

「ひっ!？」

州器のペニスは、先程よりもさらに大きく勃起していた。しかも口で清めさせられたばかりなのに、この短時間で恥垢がビッシリ溜まっているのである。

「い、いやあつ! そんな不潔なモノでされるなんて、絶対に絶対につ、死んでもイヤですわっ! 馬鹿、ハゲ、人間のくずっ、生ゴミ男っ!」

大事な所に亀頭をグリッと押しつけられて、混乱と拒絶の悲鳴を噴き上げる。腰を振りとくっつて最後の抵抗を試みた。

「聖奈たんが可愛いから、チンカスがメチャクチャ溜まるねえ」

触手ペニスがシユルシユルと伸びて、背中の光翼と頭のリングに噛みつき、強烈な電撃を浴びせてきた。

ビリビリビリビリイイイツツ!

「うああああ~~~~~~~~~~~~っ!」

翼から白い羽がパツと舞い散り、リングにも細かい亀裂が入っていく。天使にとって大事な所を責められて、身動きが取れなくなる。

「では、いくよお、聖奈たん。ボクの童貞を君に捧げるからねえ」

処女の粘膜を切り裂きながら剛棒が侵入していく。

「くあああつ！ き、汚いモノ入れるなあ……あああつ！ い、いたいっ！ あうう……や、やめなさいいいっ！」

唇で味わわされた恥垢まみれで不潔で臭い包茎ペニスが、少女にとって最も大事な所に入ってくる。あまりの汚辱感に気が狂いそうだった。

「はあはあ、これが聖奈さんの処女膜だねえ……ハアハア……いただきまあす」

州器がグツと腰を押し込むと、醜悪で野太いペニスは半分以上処女天使の中に埋まっていた。メリメリと音がしそうな迫力と執念で、処女膜をぶち抜き、さらに奥を指すのだ。

「あきやあああああ……っ！」

激痛に背筋がギクンツと反り返り、破瓜の血がツウツと太腿を流れ落ちていった。

「やった、やったぞおお！ 天使の激レアSSR処女膜ゲットオオオツ！」

少しずつ処女粘膜を押し広げ、くつろげながら、州器が雄叫びを上げる。

「うっほおっ！ これが聖奈さんのオマンコ。すっごく気持ちイイよおお」

温かい処女の血がヌルヌルと亀頭にまとわりつく感触も、最高に気分を盛り上げてくれる。吸い付くような一体感も、童貞中年を狂喜させた。

（うう……こんなヤツに……く、悔しいっ）

ザコにしか思えない人間に敗北させられ、あまつさえ純潔まで散らされて、苦痛と怒り



と悲しみと屈辱が心の中でグチャグチャに混ざり合う。

(ごめん……優斗……わたくし、穢されて……しまつて……)

生まれて初めてお腹いっぱい埋め尽くしてくる州器の圧迫感と熱さや硬さは、一生忘れられないだろう。たとえもし優斗と結ばれることがあつたとしても、比較してしまう事になるのだ。天使としても永久に消せない汚点であり、その屈辱は戦歴として記録されてしまうのだ。

「せ、聖奈……?」

優斗が意識を取り戻した。まだ朦朧もうろうとして居るのか、首を振つて眼を瞬しばたかせている。

「やつと目を覚ましたかい、ストーカー君。ちようどよかつたよ。聖奈さんとボクが一つになる所を見られたんだからねえ。クヒヒヒ」

「うああ……優斗……ああ……み、見ないで……見てはいけませんわっ!」

「聖奈ああつ! く、くそおつ!」

飛び散る赤い鮮血を見て、優斗は髪を逆立てて怒りを爆発させた。普段大人しい彼からは想像もつかない鬼のような形相だ。

「離れろ! 聖奈から離れろおつ!」

だが粘着液に固められた身体を動かすことはできず、悔しげに歯ぎしりすることしかで

きない。

「優斗、見ないで……うううっ……離れなさいっ！ わたくしから出て行きなさいっ！」

「ふひひっ！ よく見ていればいいよ。聖奈さんはボクのお嫁さんになるんだからねえ」

細くくびれた腰をつかんで、根元まで淫棒をズブリと埋め込む。グチュンツと音がして、少女の愛らしいお尻と、中年のたるんだ腹がピツタリと密着した。

「くうあああッ……調子に乗らないで、穢らわしい下等動物の分際でっ……だ、誰があなたと……結婚なんか……するものですかっ……うあああッ！」

「そんなこと言って、ボクの赤ちゃんを妊娠したら、結婚するしかないでしょ？」

勢いよく腰を振り始める州器。ズンツズンツと深く浅く捻りも加えて、乙女天使の秘奥を掘削していくのだ。

「ハアハアッ！ 気持ちいいよおお！ 聖奈さんのオマンコ！ はあああッ！ 聖奈さんも気持ちいいでしょ？ だつてこんなに、ラブラブなんだからねえ……ハアハアッ！」

ジュブツ！ ヌプツ！ ジュブプツ！ グッチュンツ！

激しく律動する剛直から、先走りのカウパーや四十五年分の童貞恥垢が、処女孔の中にまき散らされていく。

「うあっ、うううっ……そ、そんなわけ……ああうう……あるわけないでしょうっ……く

うはああうんっ！ その汚いモノを抜きなさいっ！」

激しく罵り反抗するたび、蜜肉がキュウツと収縮し肉棒を締め付けてしまう。

「んほおっ、そうはいかないよお、聖奈たん。ボクの赤ちゃんを孕ませるんだからねえ」

「あ、赤ちゃんなんて、何を馬鹿なことを！ そんなこと絶対にあり得ないんだからっ！

ハアハア……もう、動くなと……あああっ……言ってますのに……ンあああ……深いい

っ！ そんなに動かれたら……お、奥に……当たってえっ！ だめ……お腹が熱い……は

あ、ああああんっ！」

下から突かれるたび子宮が跳ね上げられて、生まれて初めて味わう未知なる快美に翻弄ほんろうされる。タブタブと前後に揺れる双乳の頂点で、固く充血した乳首が赤い残像を引きながら上下していた。

（ああ……なんですの……この感じは……？）

破瓜の傷みは薄紙を剥がすように消え去り、代わって肉も骨も蕩とろかすような甘美な痺れが、水面に広がる水紋のように全身に伝播してくるのだ。

「う、うああ……何？ うう……何ですの、この攻撃は……あはあああ……頭が……ああ

あ……ぼうっとしてきて……身体が熱くなってえ……あううんっ」

肉体への攻撃でありながら、精神攻撃でもあるような……。元々霊的存在である天使に

とって、まったくどのように対応していいのかわからない。

「攻撃じゃないよ、聖奈たん。これは子作りセックスってヤツだよお」

「はあ、はああ……こ、こづくり……せ……せ……せつくす……？」

「男と女が愛し合って、気持ちよくなって、赤ちゃんを作るコトさあ。ほれほれ」

「あ、ああ……いやあ……愛してない……き、きもちよくなんかない……はあはあ……あなたみたいなの、キモくて下等なゴミ人間の赤ちゃんなんて……死んでも欲しくありませんわあ……あうううっ！」

ズンズンと子宮口を突き上げられ、グリグリと膣口周囲を穿^{ほじ}られて、感電したような心地よさが背筋を何度も駆け上がった。

「でも聖奈たんのオマンコが、ボクのチンポをガッチリ食い締めて放してくれないんだよ。諦めて妊娠しようねえ」

「あああ……うそですわ……あああ……赤ちゃんいやっ……妊娠はいやつ、いやああつ！
あああ……優斗……た、助けてっ！」

思わず救いを求めて泣き叫ぶ金髪の天使。だが州器の抽送はさらに重く加速していく。

パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！

「うあああ……ああつ……だめえ……ああむ……妊娠だけはいやつ、いやあ……はあああ

あ~~~~~ツ!

「聖奈あ……うううつ、やめろ、やめろおっ!」

「あ、ああ……優斗……わたくし、妊娠させられちゃうつ! いや、いやなのにつ!」
聖奈が混乱しているうちにも、子宮がジワジワ降りていく。腰も後ろにせり出して、射精を受け入れるような体勢を取ってしまう。

「抵抗しても無駄無駄あ! ハアハア……アイツの前で聖奈さんに、ボクの赤ちゃんを孕ませるんだあ!」

ジュブツ! ズブズブツ! グチュツ! ジュブウウツ!

愛液の飛沫を飛ばし、媚粘膜を巻き込んだり引きずり出したりしながら、串刺し種付けピストンが叩き込まれる。

「はああつ、あひい! ンあああつ! いや……あああ……あなただけは、いやつ! 中に出したら……絶対に殺しますわっ!」

ピコン……ピコン……ピコン……ピコン……ピコン……。

キツと相手を睨むものの身体の聖気が抜け、翼はしおれ、リングの光も徐々に衰えていく。そのくせ蜜褰だけはピクピク震えながら州器の男根に絡みついて、新鮮な牡精を搾り取ろうとしていた。

「ふはあぁっ！ 聖奈たんのマンコ、締まるっ……ハアハア……そんなにされたら、もう……種付け射精するしかないよねえっ！ いくよお！」

興奮状態の州器が眼を爛々らんらんと輝かせながら細腰をつかんで引き寄せ、触手ペニスが白翼とリングにガキッと噛みついた。

「ウオオオオオオオッ！ 愛のザーメン!!」

ドビュルルルッ♥ ブビュルルルルルウウウッ♥ ドブドブドプウッ♥
「アヒイイイイイッッ！」

背骨が折れそうなほど仰け反り、魂が消し飛ぶような絶叫を迸らせた。膣洞を埋め尽くした濃厚バタークリームのようなザーメンが、子宮をグッと押し上げてから、子宮口を強引にくぐり抜けてドドッと胎内に押し入る。

「うほおおっ、コッチもおおっ！」

ドビュドビュドビュッ！ ドバドバドバアッ！

リングと光翼に噛みついた触手ペニスからも、大量射精が始まる。

「ひ、ひいっ！ 死ぬっ！ ああああぁっ！ しんじやうううっ！」

あまりにも強い邪気のせいで、子宮内に雪崩なだれ込む何十億という精子の一匹一匹をハッキリ感じ取れた。

「うあああつ……気持ち悪いのが……いっぱい、わたくしの中に入ってくる……ああ……な、中に出さないでええ！ うあああ……熱い……あ、赤ちゃんできちゃうううつ！」

「ふうおおおつ、まだまだ出るよお！ おつ、おおつ、おおほおおおおつ！」

ビュルルルツ♥ ブビュルルルツ♥ ブチュウツ♥ ドビュドビュウウツ♥

オットセイのように鳴きながら、グツと深く挿入して子宮口に密着種付け射精。狂った愛と共に子宮が膨れ上がるほどの子種汁が注入されてくる。膈内に入りきらない白濁は結合部からドロドロと溢れ出し、いかに大量の精液なのかを物語る。

「あああああ~~~~~」

断末魔の痙攣が走ると同時に、背中の中から白い羽がバアツと大量に散った。

「聖奈っ！」

「はひひひ、天使マンコ最高だよお！ き、き、きもちイイ……はあはあああつ！」

ドピュドピュドピュツ♥ ブチュルルルツ♥ ドブドブドプウ~~~~~ツ♥

優斗に見せつけながらトドメとばかり、触手ペニスのザーメンが天使のリングにシャワーのようにぶっ掛けられる。そして……。

パキインツッ！ 猛悪な邪気に堪えきれず、ついにリングが真つ二つに割れてしまう。それは天使にとって致命傷だった。

「う、ぐうう……ああ……っ」

スウツと意識が薄れた。ドロドロと流れ落ちるザーメンがリングだけでなく、流麗な金髪も美貌も埋め尽くす。猛烈な臭気が鼻を塞ぎ、喘ぐ唇にも容赦なく流れ込んで、呼吸もまともにならなくなる。

（ああ……もう……だめ……）

ピコン……ピコン……ピコン……ピコン……

砕かれたリングから最後の光が消え、聖奈はザーメン溜まりの中にグシャッと崩れ落ちた。意識は暗い闇にどこまでも沈んでいく。

「せ、聖奈……うああ……聖奈あ……！」

何もできず、ガックリうなだれる優斗。

「フヒヒヒ、ザマあ。これで聖奈さんはボクのお嫁さんだあ。ヒヤヒヤヒヤ」

夕闇迫る薄暗い倉庫の中で、州器の嘲笑だけが響いていた。

フラッシュを浴びる青瞳に無数の星が煌めいている。聖奈の中で植え付けられた露出願望が大きく育って蔦を伸ばし、淫欲に搦め捕られた精神は被虐の桃源郷を彷徨い始める。

「もつと……み、見てえ……ハアハア……もつとお……あああん♥」

淫らな衝動に突き動かされ、聖奈は乳房を覆っている網タイツを手甲グローブの指先でピリピリと少しずつ引き裂いていく。やがて円形に穴が開き愛らしい乳輪と乳首が完全に姿を現す。

「うおおお、聖奈ちゃんのオッパイ……」

二つの破口から覗くピンクのニップルを見て、観客の興奮も爆発的に膨れ上がった。ギリギリした獣のような視線が、聖奈の股間に突き刺さる。その期待に応えるように指先がスルスルと股間に降りていった。

「ああん……これから先はあ……二千円はらってください……そうしたら、今日は特別に……もつと……わたくしのすべてを……ああ……見せてあげますわよ……はああん」

今にも見えそうなワレメを手で隠したまま、いたずらっぽく微笑む。悩ましげな流し目が強烈なフェロモンとなって男たちの魂を誘引する。

「も、もちろん払う！」

「聖奈ちゃんのためなら、いくらでも、払うぞ！」

州器の用意した箱に、お札が先を争うようにしてねじ込まれた。聖奈ほどの美少女のセミアードを見せつけられて誘われては、理性が働くはずがない。

「ウフン♥ みなさん、お金をいっぱいくれて、うれしいですわ。ではあ、お約束通り……聖奈の……全部……お見せしちゃいますわ♥」

千円札の山を見て興奮したのか、ビリビリと股間の網タイツを引き裂くと、開口部は楕円形に口を開け、無毛のワレメやサーモンピンクの花びらを衆目に晒してしまふ。オオツとどよめきが起こり、異様な熱気と興奮が部室を満たしていった。

「ハアツ……ハアツ……こんなサービス、滅多にしないんだからあ……ハイ、くぱあ♥」さらなる淫欲に取り憑かれ、聖奈の両手の指が陰唇を左右に割り開いていく。膣孔が糸を引きながらくつろげられ、濡れた粘膜の内側まで見せつけていくのだ。

「ああ……あれが聖奈ちゃんのオマンコか、なんて綺麗なんだ」

「な、中まで見えてるじゃないか……そ、そこまでやってくれるのかよ」

観衆は目を血走らせながらシャッターを切る。閃光を妊娠中の牝孔に浴びせられるたび、背中が反り返り、卑猥なブリッジを描き出す。もはや完全なストリップだ。

「ンああ……イイ……たまらない……♥」

夢見るような恍惚の美貌が顎を裏返らせて天井を向く。太腿の内側に走る痙攣は、彼女

がエクスタシーを感じているからだろう。その証拠に夥しいラブリュースが湧き出して、ポタポタと床に滴るほどだ。

「ううう……や……やめさせて……はあはあ……聖奈にあんな格好させないでよ！」

優斗は懸命に抗議の声を上げるのだが、ベリアルが悪魔尻尾を生やした愛らしい尻に顔面騎乗されていては、負け犬の遠吠えだった。

「マゾ犬の分際で勝手に喋るでないぞ」

ビリビリビリッ！

指先から放たれた電撃がペニスを直撃する。金属の貞操帯は伝導率も高く、ペニスも陰囊もバラバラになるのではないかと思うほどの激感に襲われる。

「うあああああつ！」

たまらず絶叫し、悔し涙をこぼしながらベリアルの子げな無毛ワレメに舌をそよがせていく。だが味わわされるのは屈辱だけではない。悪魔とは思えない、とてもいい匂いが鼻をくすぐり、愛液も極上フルーツのような味わいで舌を止められなくなってくる。

「大人しく奉仕しておればいいのじゃ。寝取られチンポも悦んでいるようじゃしのお」

「ううう……ち、ちがう……悦んでなんて……」

悪魔少女の言うとおり、優斗の肉棒は窮屈な貞操帯の中で熱く勃起させられていた。それはベリアルへの淫愛液のせいもあるのだが、優斗が知るはずもない。

「隠しても無駄じゃ。フフフ、射精したいかえ」

貞操帯をツツツと指で撫でながら尋問してくる。金属越しの愛撫で感じるはずはないが、それがかえつてもどかしさを爆発させ、優斗を苦しめるのだ。

「うあああ……そんなこと……思っていない……射精なんかしないっ……くううっ！」

一週間の射精禁止は健全な少年にとってヘビの生殺しの辛さだったが、愛する聖奈のため、優斗は堪え続ける。

「好きなだけ堪えるがよい。ガマンすればするほど、そなたは惨めな寝取られマゾになるのじゃからな。ホホホッ、ほれもつと舌を動かせ。妾の尻の穴まで舐めるのじゃ」

「あああ……ううう」

屈辱にまみれながら悪魔少女の媚尻に舌奉仕を続けるしかない優斗だった。

「フヒヒ、聖奈たん感じまくってるねえ。じゃあオナニーショーで仕上げだよ」

どす黒い極太のバイブを渡すと同時に、州器はわざと催眠のレベルを下げた。

(えっ……わたくし……何を……ここは……?)

急に理性を復活させられ、聖奈は驚いて周囲を見る。

（な、なんですの!! こ、この格好は!）

取り囲むカメラ小僧たち、そして痴女のようなコスプレ衣装の自分に驚かされる。調教中の記憶が抜け落ちていたので、自分の身に何が起こっているのか理解できず、激しく混乱させられた。

（フヒヒ……聖奈たん、みんなの前でオナニーするんだ）

州器の言葉が頭の中で響くと、パイプを握った手がオズオズと聖域に伸びていくではないか。

（うう、この変態教師、またわたくしに術を……ああつ！ 身体が勝手にいつ！）

これから何をさせられるのか察知して、聖奈は懸命に抵抗しようとするのだが……。

「おお、聖奈ちゃんの……オ、オ、オナニーショーが見られるなんてえ！ 二千円払った甲斐があったよ」

「いや、これは第二十五話のニンジャステイックでエネルギー回復するシーンだ。そうに違いない！」

期待に満ちた眼で見つめられると、ゾクゾクと背筋が震えるような快美を味わわれる。秘奥がカアッと熱くなり、もっと淫らな姿を見せつけたいという、倒錯した願望が頭を支

配してくるのだ。

(逆らっても無駄さ。もう聖奈さんはボクの操り人形……オナニー中毒のマゾの露出狂なんだよ。ウヒヒ)

(わたくしが……操り人形？ マゾの露出狂？ そ、そんな馬鹿なこと……)

心では否定しても、肉体の淫熱はジリジリと上がり続ける。呼吸はあらぶり続け、バイブを握った掌がじつとり汗ばんでくる。少年たちの視線に対して変態露出癖が反応しているのは明らかだった。

「フヒヒ……さあ、やってごらん」

「はい……センセイ……みなさあん、これからスペシャルショー……聖奈の淫乱オナニーを……お見せしますわあ……ああん♥」

口が勝手に返事をし、淫具の先端が蜜穴にクチュンツと押し当てられた。

(ひいっ！ だめ……そんなことさせないで……だ、だめえっ)

心で叫んでも無駄だった。野太い淫具がズブズブと我が身を貫いて侵攻してくる。視姦に爛れきった肉体には、十分すぎる快感だった。

「うああ……ああん……太いのが……入って……きちやう……ああ……オマンコ、イイ……見られて感じちやう……はああうん」

花蜜を溢れ返らせながら、ついにはバイブが最奥に到達し、子宮をグイッと押し上げる。ヴヴヴヴッ！ ヴィィィィ〜〜〜ンッ！

さらにバイブが振動を開始して、柔らかな牝肉を抉るように震撼させた。

「んはあっ……中で……う、動いて……あ、ああ〜〜〜んっ！」

ズキンと痛みにも似た快感が突き刺さり、聖奈は腰を浮き上がらせる。淫具には突起がいくつも生えており、それが女の泣き所を的確に責めてくるのだ。

(ンあああ……どうして……人前でこんなことさせられて……感じちゃうのっ?)

妊娠によって熟れた女の性感帯が敏感になっているのだが、妊娠に気付いていない聖奈には理由がわからない。

「おお、あんな太いバイブ……いやニンジャスティックを……」

「これは撮るしかないぜ！」

パシャ！ パシャ！ パシャ！ パシャ！

「うああん……聖奈のいやらしいところ、もつと……撮つてえ♥」

(いやあ、撮らないでえ！ ううあ……いやなのに……こんなことしちゃいけないのに……

……ああ……手が……止まりませんわ)

声援とシャッターに煽られるように、ズブズブッと自虐のピストンが打ち込まれる。

極太張り形が子宮の底に食い込むたび、赤い火花が脊椎を駆け上がって脳幹を直撃し、そこに降り注ぐフラッシュの雨が、快感を何百倍にも増幅させるのだ。

「聖奈たん、オッパイも舐めて」

「ハアッ……ハアアッ……ハイ……ああ、ああん」

網タイツに包まれたマスクメロンのような乳房を持ち上げる。若さに溢れた乳果は重力に負けずにツンツと尖って、真つ赤に充血した乳首が裂け目から突き出されていた。それを愛らしい唇がパクリとくわえ込む。

「はむっ……あふうんっ……ムチュツ……ちゅぱっ……あはあん♥」

チュウチュウと吸うたびに鋭敏な快楽が乳腺いっぱい広がって、気が遠くなるほど気持ちがいい。

（ああ……胸まで……すぐく敏感になってる……どうしてこんなに感じちゃうの……？）

「チュツ……チュツ……見られながらオナニーするの、とつても気持ちいいの……はああむ……もつと見て……チュツ……チュパッ……もつと撮って下さあい……ああああ……むふうん♥」

なぜか口の中にもどこか懐かしい甘味が広がってきて、ますます口を離せなくなってしまふ。その間も淫具はグリグリと円を描くように回転し、理性も矜持もバラバラに碎きな



がら理性の壁を掘削していく。

(ああ……わたくし、どうなっちゃうの……頭が……変になるう……)

脳は露出とオナニーの快感に痺れきり、操られているのかどうかもわからなくなる。

ヴィーン！ ジュブツ！ クチュツ！ ヴィィーン！ ズブズブツ！ グッチュンツ！

ピンク色の柔褌を捲り返しながら後退した淫具が、今度は媚粘膜を巻き込みながら根元まで埋め込まれる。何度も繰り返すたび、濃厚な本気汁が溢れ出し、ムンムンと牝の匂いを漂わせた。

「ハア……ハア……あああ……イイ……マンズリ見られて……感じるのお♥」

「くうう……エ、エロい……エロすぎだろ……」

「こ、これは第四十話のヘビに胸を噛まれたニンジャガールが……って、もうそんなのどうでもいい！」

その淫気に巻き込まれたのか、少年たちは片手でカメラを構えたまま、肉棒をシコシコと扱き始める。

「聖奈たんをみんながオカズにしているよ、フヒヒヒ」

「あ、あああん……みんなも……」

潤んだ瞳とカメラのレンズ、視る側と視られる側、双方の快楽が交錯して共鳴し、かつ

てないほどの興奮がこみ上げてきた。

「ああん……もつと見て……ああ……聖奈のオナニー……オカズにして……ああ……
いっばいオチンポ、シコつてくださあい……はあ、はああん♥」

（だめえ……こんなコトしたくないのに……も、もう……止まらないっ♥）

淫語が溢れ出すのを止められず、肉体は理性を振り切つてどこまでも暴走していく。剛棒ピストンで持ち上げられた子宮がスツと落ちる。それを次のピストンにズンツと串刺しにされ押し上げられる。蹲踞のポーズで踏ん張っている赤ブーツも屈伸し、極太パイプの威力を増している。

「ああん！ 見られながらオナニーするの……気持ちイイのおっ！ ハアハア……変態コ
スプレオナニーいっばい見て……ああ……聖奈もドスケベマンコ、ズボズボするから……
……みんなも……もつとオチンポシコシコしてえ♥ みんなのエッチな顔を見せてえ♥」
（ああ……これは夢……夢に違いないわ……）

股を広げ、腰をくねらせ、乳房を揺すつて、少年たちを誘惑する淫乱天使。目の前には七色に輝く星がキラキラと舞い散つて、現実と夢の区別もつかないまま露出オナニーの快感に溺れていく。

「ハアハアッ！ あああ……もう、もうきちゃう……はあああん……みんなもきてえ……

聖奈をオカズにして……センズリしてえ……あああ~~~~~♥

ヴィヴィヴィヴィ~~~~ンッ!

バイブの振動が最大になり、悪魔の子を孕んだ蜜壺をこね回す。たまらず噛みしめる歯が乳首に甘い痛みを刻み込む。全身の神経が子宮に繋がれてしまったように、肌に食い込み、擦れる網タイツの感触にすらキュンキュンッと子宮が感じてしまう。

「ああつ! イクツイクツイクウツ! 見られながら、オマンコイク~~~~つ♥」

金髪ツインテールを振り乱し、汗濡れた裸身を仰け反らせ、左右に捻って揉み搾る。開ききった太腿にも生々しい痙攣が走って、媚肉も淫具をギュウツと締め付けた。

「くおおつ! たまらん!」

「聖奈ちゃんに、ぶっ掛けだああつ!」

ドビユツ! ドビユツ! ドビユルルルツ!

聖奈の妖艶な魅力に引き込まれ、少年たちも次々に発射した。噴き上がる白濁が次々と聖奈に命中し、灼熱感が墮落の焼き印となって少女天使を官能地獄に引きずり込む。

「あ、あああ……熱い……オチンポミルクいっぱい……ンあああ~~~~つ!」

プッシャアアアアアアアッ!

牝潮を噴き上げ、さらには母乳までもが噴水のようにピュルピュルと噴き出した。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー!!

【偶数月】
隔月発売
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】
隔月発売
1-3-5-7-9-11月

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月
発売!



2次元
**ドリーム
マガジン**
2D DREAM MAGAZINE

UN COMIC
アンリアル

**敗北乙女
エクスタナー**
Defeat Maiden Ecstasy

あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

KTC 編集・発行 **キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコビル TEL: 03-3555-3431 (販売) FAX: 03-3551-1208

最新情報は公式サイトへ! **キルタイムコミュニケーション**

検索

二次元ドリームノベルズ

全巻収録
エッセイ
ノベルズ

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル!



小説家になるこの男性向けサイト「アクトアインノベルズ」から書籍化!

姫騎士 クラスメイト!

戦うヒロインを屈服させちゃうかなり過激な陵辱系ライトノベル!

リアルドリーム文庫

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ



あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の外伝作品もあり! 電子書籍でしか読めないノベル



二次元ぷち文庫

二次元ドリーム文庫